

秋水と兼松家

ジョンソン宛秋水漢詩の来歴

兼松 三太郎

兼松義整よしまり(一八七三〜一九二二)は私の父の滋(一八九〇〜一九五〇)の長兄なので伯父ですが、私が物心ついた頃はすでに他界しており、何の記憶もありません。

滋は一九一一年より一九一三年までの間、東京警視庁刑事課鑑識係に勤務して居り、義整にはずいぶん世話になったようです。中村中学校卒業後、東京の義整兄の所へこころがり込んだふしがあります。書生のようなことをしていたと思います。

一九二二年、高知朝倉歩兵聯隊(憲兵)に兼松病院を開設するにあたって帰省副院長を務める。一九三四年、愛媛県南宇和郡一本松村より請われて村医となる。

一九三八年三月、兼松三郎急逝にあい、親族会議の結果、再度中村に帰る兄三郎の跡役を受け兼松病院長となり、一九五〇年病没するまでその職にあつた。

さて、秋水の漢詩(サンフランシスコでジョンソンに贈り、後に日本に返送さ

れたものか)との関係は義整が秋水を援助していたことにあると考えられます。

幸徳家が贈られた漢詩は義整が所持して居れば何時摘発されるかわからない為、直接関係のない滋に渡され、ひた隠しに隠し、戦後まで来たと考えられます。漢詩を掛軸に修められたのは滋で、中村で懇意にしていた表装店に依頼したと聴いています(時期不明。保管の布袋には祖父の義整がはいっていた袴の生地を使っています)。

滋の長男、兼松雄象おとむね(私の兄、故人)は京都大学医学部卒業の医者で在学中結核で入院、同室であつた住谷馨さんとは仲が良かった。ご存知のように、京大は当時左翼の極に見え、滋病没後軸を持ち出し興味ある人に見せたようですが、偶々住谷さんのところとどまり、そのままになって居たのを本庄豊さんに預け、現在の兼松三家(兼松佳子、三太郎、形而)で協議した結果、私物化より中村の然るべき筋に寄贈することを決し、「秋水を顕彰する会」の田中全さんを通し、四万十市に寄託したものです。

余談になりますが、太平洋戦争が激化した一九四五年の五月に中村も爆撃されて生命の危機を感じるようになった時

母と弟と私の三人は愛媛県に近い十川(現四万十町)の地吉に疎開しましたが、その時は他の荷物と一緒に疎開しました。数奇な運命を辿った軸ですが、手にした人たちが丁寧に扱ってくださったため、損傷もなく次の人々の参照に出来ることを欣快の至りとして居ます。

補記 田中全

兼松家は幸徳家の親戚。義整は秋水より一歳下で宮内庁に勤務していたという記録(第三郎の四男義勇の手記)がある。大逆事件の頃は東京監獄に近い四谷区塩町でタバコ店(兼松商店)を営んでおり、獄中の秋水に身の周り品等の差し入れの労をとっていた。義整は秋水からたくさん本を預かっており、刑事からマークされていた。その様子を義整の妻増江が秋水の母多治に知らせた手紙が残っており、山泉進氏が「大逆事件の真実をあきらかにする会」ニューズ「四四、四五号(二〇〇五、六年)で紹介している。秋水の母多治が秋水に最後の面会のため上京してきた時もここに泊まり、師岡千代子もかけていた。

秋水は処刑の前日(一月三日)、義整宛に別れの手紙を書いている。「御無沙汰になりました。御手紙難有ふ、是迄一方ならぬ御親切御厄介になりました。改めて御礼申上げます。増江様にも同様御礼御用心を願います。十分の平和と安心を以て刑の執行を待っておりますから、幸ひに御安心下さい。不取敢告別まで。早々」(秋水全集第九巻所収)

住谷馨(元同志社大学教授)は住谷悦治(元同志社総長)の長男。この秋水漢詩は悦治も編集協力した「大逆事件アルバム」(秋水全集補刊、一九七二年)に掲載されている。

兼松家から昨年十月四万十市に寄託されたこの秋水漢詩(下の通り)は秋水生誕一五十年記念展(市立郷土博物館)で公開した。市立図書館内「秋水資料室」

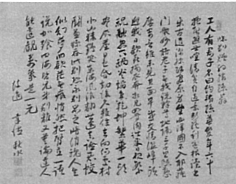
にレプリカを常設展示中。

臨別贈約翰孫

工人有君子 名曰約翰孫
華髮年八十 獨居避世喧
清貧自適意 斷絕利書根
談書樂古道 探探政教原
身生西洋國 無我說釋尊
衆妙語老子 慙歎屢奇言
地隔三千里 雖未見其面
雖未見其面 早感交情溫
埠頭迎我日 歡喜揭衣奔
相見如骨肉 往來日夜繁
祝融忽下禍 炎燄焦乾坤
却後一朝盡 灰塵日色昏
卻後久難住 去向何處村
北山猿鶴笑 東海風浪翻
世途真險惡 蚊鴨兼鯨吞
此別恐永別 思之暗消魂
人生似幻夢 舊歡忘無痕
惘然把臂立 一語說如猿
四海皆兄弟 別離又無論
達人能達觀 萬象是一元
後進 幸徳秋水

釈文

お別れに当ってヨハンセン(ジョンソン)のこゝろに贈る。労働者に紳士がいる、その名をヨハンセンという。白髪頭で六十歳、独り身で世の中の煩わしさとは無縁だ。清貧で心のままに生き、利害などには拘らぬ。書物のなかの古い教えを樂しみ、社会問題の根源を探索している。西洋の国に生まれながら、キリスト教を信じることなく、「女の又た女なるは、妙の門なる」と老子の教えを諳んじ、「色受行想識いずれも自性が無く、空である」と釈迦の教えを語る。三千里の遠きを隔て、屢々殷懃な手紙をくれ、顔を合わせずとも、早くから交情の暖かみを感じていた。港に私を迎えに来てくれたとき、裾をからげて走り寄ってきて、会って見ればまるで一面下段に続く



秋水がサンフランシスコでアルバート・ジョンソンに贈った漢詩



兼松家の人たち(左:三太郎氏)秋水漢詩の前に

「美しき座標」からの想起

アナキズム研究者 神奈川県鎌倉市 亀田 博

幸徳秋水はジャーナリストの大先達として非戦論を展開、常に民衆の側であった。今回、高知新聞学芸部長の天野弘幹さんの講演を聴き、秋水もその源の一人である不屈のジャーナリストが、現在の日本社会でも健在であることを心強く思った。

講演内容はクロボトキン宛の書簡をめぐるとあったが、秋水のサンフランシスコのアナキスト、アルバート・ジョンソン宛の英文書簡公刊の変遷やロンドンのアナキストたちの反応をまとめておきたい。

秋水がアルバート・ジョンソンに宛てた書簡は一九二一年発行のアメリカの『マザーアース』誌に分載して掲載された。明治文献の『幸徳秋水全集』一九六九年刊には英文のままの収載、遅れば山崎今朝弥発行の四六判『解放』一九二六年九月月号は「幸徳秋水書簡集」そのフランズ装の三片を断裁し「幸徳伝次郎全集」として刊行した第五巻「翰文集」一九三一年四月刊には一九〇五年八月付け書簡の翻訳が掲載されている。発禁を避ける

ためか一部空白で掲載（参照、所蔵の原本、小松隆二『日本労働組合論事始め』論創社より）。

一九五四年に塩田庄兵衛により「幸徳秋水の日記と書簡」、一九七一年に『大地』誌に発表された幸徳事件に全書簡が翻訳され掲載。後者はアナキストのはしめとよしはるさん発行、印刷所を営み、そのバルカン社発行としている。

また、一九〇六年十一月二五日発行『光』二八号にはクロボトキンから幸徳秋水宛書翰が翻訳され紙面に掲載「親愛なる幸徳君、略 貴下、予の論文翻訳の許諾を求められる、貴下に向けて該許諾を興えることは、予の非常に欣喜する所なり」（所蔵の原本参照）一九〇六年九月二十五日、英国プロムレーに於いて。

筆者の手に『日本の殉教者』と題されたA四判横二つ折りの四頁のリーフレットがある。発行日不明。ロンドンのフリーダム社は発行したものである。同グループはクロボトキンのロンドン亡命時に密接な関係があった。表紙は「萬朝報」時代の秋水、堺利彦たち四人の肖像写真。編者前書きの一部引用「一九一一年一月二四日、日本政府は十二名のアナキストを天皇暗殺計画という冤罪で処刑をした。それは密室での裁判によるものだった（この記事は二月発行の『フリーダム』誌より転載）本文は幸徳秋水の活動歴など。文末は「幸徳とその少数の仲間達は運命に向かっている。死だ。その死は人類が知る限りストイックで淡々としたものである。一月十八日カリフォルニア」。

コロナ禍に幸徳秋水を学ぶ

高知県香美市 山崎 万里

仕事を定年退職して十年余。自分の人生も残り少なくなり、好きな事をして生きようと思っていた。しかしこの十年で子や孫世代の未来を考えると絶望的な気持ちになる事態が次々と起こり、傍観者でははいられない、自分でも何か行動しなければという思いにかられている。

一つは地球環境破壊と地球温暖化のこと。二〇一一年三月の東日本大震災と福島原発事故、そしてこの後日本だけでなく世界中で次々と起きていた大災害。地球温暖化が言われて何十年もたつというのに、何もせずにここまで来てしまった。グレタさんという少女が、たった一人でストライキを初め、若者が立ち上がり、大人たちはかつて経験したことのない自然災害が次々と起こるのを目の当たりにしてやっと気づいた。人間（先進国の）は地球の自然環境を破壊して、自分たちの欲望を満たしてきたのである。大量生産、大量消費、大量廃棄の流れにどっぷり浸かって生きてきたことに、今更ながら思い至る。自分の生き方を根本から見直す必要に迫られている。

二つ目の心配事は二〇一五年、安保法が強行採決され、日本は戦争できる国になってしまったこと。戦後生まれの私は、平和憲法のもとで戦争を経験することなく育ち、戦争の悲惨さを学び、戦争ほど愚かなものはないと思っっている。未来のことも達が戦争に行くことのないように、憲法九条を守り、この安保法を廃止したいと思っっている。

こんな不安を抱えながらも、忙しく生活していた二〇二〇年三月、新型コロナウイルス

ウイルス感染症による緊急事態宣言が出て、外出することも、人と会うこともできなくなりました。時間ができたので家で三〇〇四年前の本を整理しながら、読みかけの本を読んでいた。そのうちの一冊、住井す系と永六輔の対談『人間宣言』の中に、住井す系が「私が影響を受けたのは、幸徳秋水ただ一人です。一」というくだりがあり、幸徳秋水の事が書かれていてハッとしました。高知出身の幸徳秋水について、ほとんど知らずにいたから。

ちょうどその頃、非戦の碑の建立運動や、高知新聞に「美しき座標」の連載が始まり、二〇二二年が秋水生誕一五〇年、刑死一一〇年の年であることを知った。刑死一一〇年後に、私は秋水を学ぶことにした。顕彰する会の冊子や「美しき座標」の高知新聞連載で秋水や平民社を巡る人々を知り、どのように生きて闘ったかを知っている。これからの連載も楽しみにしている。

そして今、二〇二二年二月末、ロシアがウクライナに侵攻しているというニュースが世界を駆け巡る。秋水没後にも世界中で多くの戦争があった。いつになったら人間は戦争のない平和な世界を作れるのだろうか。

テレビ画面に、SNSを通して世界中の「戦争ノ」の画像が映し出されている。現代はSNSで世の中が動くこともあるし、世界と繋がれる。微力だけれど、私も身近な人や世界中の人と繋がって「戦争反対」を言う。秋水や戦争に反対してきた人々の歴史に思いを馳せながら。



フリーダム社リーフ表紙

以上

美しき座標 百年後の人へ

高知新聞学芸部長 天野弘幹

私は平成になった年に入社し、戦争(七三一部隊)、人の命(高知日赤脳死移植)、農業(鳩オヤジさん連載「地を這う」)、漫画(きんこん土佐日記)など、いろんな企画にかかわってきました。去年から「美しき座標」を巡る。友人々々を連載しているのは、新聞社を巡るような役割で大逆事件に向き合ってきたかを考えるためです。

まず、直近の情報から。高知新聞は昨年十一月二十六日付に秋水のクロボトキンあての英文の手紙「通がはじめてオランダで、きのう付(一月二十三日)」ではさらに八通がロシアで見つかったという記事を出しました。これらは学芸部の若い記者が中心になって書いてくれました。いずれも膨大なデジタル資料の中から、オランダでは田中ひかるさん(明治大学教授)が発見し、ロシアでは地元研究者が見つけ田中さんに連絡があったものです。



高知新聞「美しき座標」連載開始 2021.1.1

クロボトキンが秋水にあてた書簡五通は官憲が押収して残っていますので、これ二人のやりとりがはつきりしました。この中で、秋水はクロボトキンの著書「麵麩の略取」を日本語に翻訳することの許可をもらうなど重要なことが書かれています。往復書簡は秋水がアメリカでアルバート・ジョンソンにも会って帰ってきたあと、一九〇六年九月から一九〇九年七月までの期間です。秋水の英文は大変きれいでオソドックスな書き方で勉強の跡がうかがえます。オランダの一通は高知県立文学館「生誕150年幸徳秋水展」で展示されました。

「美しき座標」の連載の背景には、秋水刑死百年の時、高知新聞は特集をするにはしたが、私自身はきちんとしてたことをやれなかったという反省、もどかしさがあります。いまやらないと、という思いから昨年の元旦からスタートし、これまでに四部書いています。

第一部は「楽しき園遊会(一一二回)」。平民新聞発刊一周年を記念して準備してきた読者親睦会は当日になって官憲から中止させられたが、秋水らはうづぶんぼろしに向かいの茶屋で騒いだ。弁慶の仮装で勸進帳の寸劇などをたて、さんざん痛めつけられてもへこたれない笑いがあつた。こうした姿は秋水、堺、西川などの回想録に書かれていますが、それぞれの全集にバラバラに収録されています。だから全体像が見えてこなかったが、まとめてみると違った景色、風景が見えてきます。

第二部は「自転車で行こうよ(一一二回)」。人力車に代わって自転車普及、秋水たちも夢中になった。曲芸乗りなど、いろんな乗り方が流行った。



市立文化センター中会議室

第三部は「とっちゃんの愛(一二七回)」。田中正造、第四部は「おかしな兆民先生(一三五回)」でした。

いずれも、ピアノ、真つすぐ、情熱的で明るく人間群像を描きたかった。(編集注、第五部は堺利彦らの「獄中生活」を今年二、四月に二七回連載)

二〇一四年から一八年にかけて高知県立大学の図書館が三万八千冊の本を焼却したことが問題になった。他の大学や市町村図書館などに分けることも相談せず、みずす書房「現代史資料」や、秋水を擁護した徳富蘆花の全集などもあつた。図書館の司書はトラックに積んで運んだ本が燃え尽きるのに立ち会っています。

一方で神崎清は、戦中、銀座松坂屋の古書店で見つけた小山松吉(大逆事件の主任検事)の極秘の講演速記や、敗戦直後焼却される寸前に奇跡的に救い出された裁判資料(秋水、須賀子、大石、森近らの手記など)を手に入れた時の興奮と感動を「革命伝説」第四巻の「あとがき」に書いています。

私は高知新聞の前身の土陽新聞を時々読みます。関東大震災の記事では「不逞鮮人あばれる」「高知は大丈夫か」などと書いています。大逆事件判決のあと、杉パンで乾杯をした裁判官、検事たち、大杉栄夫妻と甥が虐殺された事件、足尾鉾毒で荒廃した山・谷・これらはうやむやにされたまま。司法も同じように継続している。新聞のつくり方もそうかもしれない。

秋水は死刑になる時、百年後にはわかってくれるだろうと言ったけれど、百年後のいま本当にわかってくれたのだろうか、少しはましになってきているのだろうか。彼らの結末はつらいことであつた。そんな彼らを書くのは悲しいことだが、自分は研究者とは違う書き方があるのではないかと。彼らの主義、主張を解きほぐして、素朴な人間性や笑いを通して、心に届くものを書きたい。

坂本清馬が残している細かい字で書いた記録、手記なども気になってきます。また、秋水の墓が鉄柵で囲われたという話もありますが、写真がなかった、真偽のほどはわかりません。真実なら鉄柵を打った人もいれば、抜いた人もいる。そのさい、許さないと思つた人、かわいそうだと思つた人、おびえた人などがいたはずだ。

秋水らが平民社をつくった時には、山路愛山のように戦争に賛成した人も顔を出して友情を紡いでいた。いろんな人がいた。そうした中で、平民新聞は戦争反対のメッセージを出した。それはその後、日本がどう進むのか「座標の点」を打ったという進むのです。

彼らは危険にあらがいがら今とは違う社会をつくらうとした。しかし、その後日本は七十ことはダメな方向に行った。しかし、そのことにキチンと向き合わないと、また同じことの繰り返しになる。

クロボトキンと秋水の書簡、神崎清の作業のように、バラバラを集めて、それらが写そうとしたものを見る。

石川三四郎は書いています。そこには、くめども、くめども、尽きない美しき泉があつた。私はそういう時代、そういう彼らと、私を置いていきたと思っています。

(一月二四日、幸徳秋水刑死一一一年記念講演 要録)